

日本国際秘書学会 2024 年度 東・西日本支部 合同研究会 活動報告

日時：2025 年 8 月 16 日（土）13：00～15：30

場所：Zoom オンライン

内容：研究発表：「行動経済学を使った現場での試行の取り組み」

大阪国際大学短期大学部 森田 篤司先生

基調講演：「地域連携や産学連携を通じた女性人材育成の新境地」

清泉女子大学 地球市民学部 教授 安齋 徹先生

昨年に引き続き今年度の支部研究会も、東日本支部と西日本支部の合同で開催した。

今年度の合同研究会では、大阪国際大学短期大学部の森田篤司先生による研究発表と、基調講演は清泉女子大学 地球市民学部 教授 安齋徹先生を講師にお迎えして実施した。

1. 研究発表

森田篤司先生による「行動経済学を使った現場での試行の取り組み」というテーマで発表が行われた。行動経済学は、「人間は必ずしも合理的に行動しない」という現実を前提に、心理学や社会学の知見を取り入れて、人間の意思決定や経済行動を研究する「経済学+心理学」の融合とも言える学問である。また、古典派経済学に比べると 50 年ほどの歴史の若い学問とのことで、21 世紀に入ってから急速に普及し、現在は政策やビジネスなど幅広く応用されているとのことである。

今回のご研究では、森田先生のご勤務先の大阪国際大学短期大学部の学生を対象に、行動経済学の考え方をを使った改善の視点から、学生が日常で抱える学習の問題（期限までに課題を提出できない…など）について検証し、その対策を考察した興味深いご発表であった。また、最後に、期限までの課題提出において、「努力を仕組み化できないか」の観点で今後試行してみたいこととして、「わかりやすく伝える」「繰り返し伝える」「現状をフィードバックして、（自ら）目標設定をさせる」「頑張ったこともフィードバックする」の 4 点を挙げられ、大学の現場で学生を指導する参加者からのアドバイスを呼びかけてご発表を終了した。

2. 基調講演

清泉女子大学 地球市民学部 教授 安齋徹先生による基調講演「地域連携や産学連携を通じた女性人材育成の新境地」では、性役割に縛られることのない人材育成の指導について、これまでの実践記録を基にご講演いただいた。ご講演冒頭で、安齋先生が大学教員に転身なさる前の 28 年間の会社人生の中で従事なさった営業・企画・秘書・人事など幅広い業務についてのご紹介があったが、それら業務のご経験と実績が、先生が手掛けてこられた人材育成の大きな礎になっていると感じた。

「教室を飛び出す学び」「日本一ワクワクドキドキするゼミ」「自立できる力を育てるゼミ」をキーワードに、安齋ゼミでは企業や地域との連携プロジェクトを通じたフィールドワーク型授業の実践を中心にゼミ指導をしておられ、学生たちはそれら活動から、「企画力」「行動力」「協働力」を身につけ、将来社会で活躍する一員として成長するとのことであった。また、その成長の過程や結果ともいえるゼミ生の活動記録（安齋先生が撮影なさった映像や画像）も講演の中で紹介があり、ゼミ生たちの生き生きとした様子がモニターを通して伝わってきたのが非常に印象的であった。

今回のご講演では、大学教育現場における、時代に即した数々の人材育成のモデルをご教示いただいたが、これは一般企業の社員教育にも活用できるのではないかと考える。

講演後は、以下の活発な質疑応答が行われ、大変有意義な支部研究会となった。

<質疑応答記録>

質問：

ゼミプロジェクト活動は主に第何学年で行っているのか？

応答：

3年時にゼミプロジェクトを経験するため、同じ学年で行っている。4年生は主に卒業論文に取り掛かる。安齋ゼミでは4月からでは時間が足りないので、春休みからとりかかり、述べ90時間を春休みに活動する。春夏休みを使用しないと終わらない。実は、休みのほうが比重は高いかもしれない。就職はさまざまな企業や職種に就職する。最近、新卒よりも転職力のほうが大切なのではないかと考えている。

質問：

短期間に複数の企業と関わりを持てるのは、過去の企業とのコネクションを利用して活動しているのか？また、昨今増え続けている少子化による女子大学の閉校や共学化について、女子大学ならではの教育の意味はあると思うか？

応答：

女子大学が減少していく中で、主に飛び込み営業で行っている。常にアンテナを張っており、お客様センターにメールをするというスタイルが多い。相手にとってのメリットや相手がどうしたら社内稟議をかけられるのかを考えアプローチする。企業側のやる意味を常に考えている。小さいもの（プロジェクト）をたくさんやりたい。継続していくと、後輩の重荷になるのではないかとと思うので、新しいプロジェクトも担当したい。

女子に特化して教育をしていく必要はまだあると思うので、女子大学・女子短大での教え方はあるのではないかと考える。

質問：

男女共学の取り組みでも参考にできるのではないか？共学の場合、実施していく際に気をつけたほうがよいことはあるか？

応答：

大学では女子学生のほうが強いかもしれない。大学では男子学生のほうが心配で、そう考えると同じでよいのではないかと考える。男子学生がいるほうが、案件はもう少し広がったり挑戦できることもあるかもしれないが、ほとんどのケースは同じでよいのではないか。

質問：

女子に特化して、教育をしていく際に大切にしているものは何か？

応答：

女性学の中のフェミニスト・ペタゴジーを大切にし、それをどう具体化しているかについて考えている。

以上

9月16日

作成：上田 知美